

ドイツ・アウクスブルクで得られたこと

岡崎 涼太

他のメンバーが楽しそうなアウクスブルク市の滞在記を書いているので、僕はアウクスブルクで得たもの、感じたものをここに書かせてもらいます。

・Zeidler 家

「Hallo~！Ryouta！」と独特のなまりで挨拶してくれたのは、ホストマザーの Betty とホストファザーの Karl に初めて会った時でした。独特のなまりというのは、ハローのハにアクセントがあり、最後に伸ばす時の音が下がることです。涼太の“りょ”も英語にもドイツ語にもない発音なので、違和感がありましたが、イギリス人より上手だなと思いました。この日からこの挨拶を毎日聞くことになりました。最初の挨拶だけでこれだけの発見があったので、初の言語圏に不安と興奮を覚えました。緊張からか、話の意味を捉えられないことがありました。でも、聞き返すともっと簡単な単語をスマートフォンで検索してくれたり、写真を見せて説明してくれる優しい2人だったので、すぐに色々話すようになりました。僕は、僕のバディであるはずの Linda がいないことが気になっていました。実は、出発の一週間前に Linda にメールを送っていたのですが、返事が返ってきていませんでした。少しテンションの高い内容でメールを送ったので、嫌われたのかなと心配していましたが、忙しさのため返事を忘れていた、とあとから聞き、ほっとしました。

僕のホストファミリーの Zeidler 家は、6

人家族で、2人の兄と1人の姉は成人して家を出るため、現在は3人で暮らしています。Lindaは21歳の大学生で、乗馬と色々な音楽を聴くことが好きだと言っていました。僕も知っている洋楽の名前を挙げて、会話が弾みました。特に Bruno Mars の「The Lazy Song」で、聴いていたら本当に lazy になるよね、と盛り上がりました。写真は、Betty と Karl の孫にあたる Luca も写っています。



町の祭りでの1枚

僕は、この家族と、日本とドイツの違いやドイツの風習や文化などをたくさん話し合いました。そして、それ以上に、現地の考え方や生活に直に触れることで学ぶことがありました。本当に感謝してもしきれませんでした。

・アウクスブルク市

私のアウクスブルクの印象は、至るところがデザインに凝っていて、大きなものから小さいものまですべてにこだわりがある、といったものでした。

たとえば街並み。色使いがよく、デザインも整っていて、見ていて惚れ惚れします。

道路ですら雰囲気は漂っていると感じました。日本でいう古都京都のような古い街並みを街全体に持つのがアウクスブルクです。少し郊外に行くと森と畑が広がり、とても緑が豊かなところでもあります。その郊外に何キ口にもわたる等間隔にきれいな並木道があり、僕はその道から見える景色が好きでした。



アウクスブルク市内



初日の夕食

これは夕食での1枚です。すこしわかりにくいですが、右下に黄緑のペーパーナプキンがあります。毎食ごとに、色々なデザインのペーパーナプキンが置いてあり、お洒落だなと思いました。アウクスブルク市内を歩いていると、ペーパーナプキンを専門にしていそうな店があったことから Zeidler 家が特別なわけではなく、人々に浸透しているものなのだと感じました。このことから、アウクスブルクの人々は普段の生活にデザイン性を求めているのだと僕は考えました。

この写真は、幼稚園に置いてあったおもちゃの1つです。このおもちゃは、写真の表側はふつうの動物の写真で、裏返し、下の光源に置くことでその動物の骨格が映し出されます。これにより、幼児は動物の体のつくりを楽しく学ぶことができます。大学2回生になった僕でさえ興味を持ち、写真を何度も裏返しました。このおもちゃにも、僕はデザイン性を感じました。日本のおもちゃは、企業競争のためおもちゃに楽しさだけを追求していると僕は感じていません。しかし、ドイツのおもちゃは何を子どもに伝えたいかというところから入り、次にどう興味をもたせるかを考えているのではないかと思い、その、どう興味を持たせるか、という考え方からこのようなデザインが生まれてきているのではないかと感じました。



幼稚園でのおもちゃ

このように、アウクスブルクで日本にはないたくさんのデザインに触れることができました。さらに、アウクスブルクはあまり観光客が目立たなく、街全体も観光業に力を注いでいるという雰囲気が感じ取れなかったので、純粹にドイツ・アウクスブルクを感じることができました。なので、アウクスブルクは僕にとって思い出深く、お気に入りの街の1つとなり、デザインがあふれているこの街にまた帰ってきたいと思っ

ています。